



Title	ウェブスケール・ディスカバリー（WSD）利用者の利用状況と認識：インタビュー調査による探索的研究
Author(s)	久保山, 健
Citation	
Version Type	AM
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/84802">https://hdl.handle.net/11094/84802</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ウェブスケール・ディスカバリー (WSD) 利用者の利用状況と認識 —インタビュー調査による探索的研究

大学図書館研究会第52回全国大会（オンライン）  
研究発表（2021.9.18）

1

久保山 健 大阪大学附属図書館

※本発表は、同志社大学・総合政策科学研究所に提出した  
修士論文（2021年3月修了）の内容を元にしたものです。

# 目次

1. WSDの背景と現状
2. 先行研究と検討課題
3. 研究目的
4. 調査手法
5. インタビューの結果
6. 考察と課題
7. 本研究の意義

# 1. WSDの背景と現状

- ▶ WSD：自館蔵書に限らず、雑誌論文を含めた多様な学術情報を一括して検索できるツール。
- ▶ 国内では、2008年頃から「次世代OPAC」の機能紹介や課題が議論。  
\*片岡真（2010）など
- ▶ 国内大学のWSD導入率
  - 15% (2016) → 19% (2019) → 21% (2020)
  - 設置主体別で最多の国立大学  
27大学 (2018) → 25大学 (2019)  
→ 26大学 (2020・30%) \*大学数は86のまま \*総務省統計局 (2021)

## 1. WSDの背景と現状

➡世界トップ50大学ではWSDが主たるツール

- WSD導入：47大学 (94%)
- 「WSD」が最初の検索オプション：  
40大学 (80%)

\* 2017年9月

\* THE (2017)

# 1. WSDの背景と現状

## ➡ 国内で見られる「OPAC主義」

### (1) 「主要20大学」

(国立七大・早慶MARCH・関関同立・東京工大・豊田工大)

- WSD導入：13大学

\* 2017年9月。2021年7-8月も同数（名大はWSD中止、法政が導入）。

- 全てのWSD導入大学（独立したOPACを持つ大学）で、  
OPACが最初の検索オプション。

\* 2017年9月（慶應以外の全て）。2021年7-8月も同じ（早慶以外の全て）。

- 独立したOPACに電子ブックを含む：

10大学 (2017.9) → 15大学 (2021.7-8 \*8月に変更の東大を含む)

\* 東京工大・豊田工大：Times Higher Education2017 (ASIA) でトップ50に入った2大学

# 1. WSDの背景と現状

## →国内で見られる「OPAC主義」

### (2) 国内早期導入41大学

- 「OPAC」が最初の検索オプション：73%（30大学）

\* 2017年7月。

2021年7-8月は65%（26/40大学）。1大学はWSD中止の模様。

\* 「国内早期導入41大学」は、kitone（2014）から。

## 2. 先行研究と検討課題

### ▶先行研究

- (1) 北米でのOPAC調査 Yang and Hofmann (2011) など
- (2) 国内での機能紹介、製品の紹介  
工藤・片岡 (2008)、久保山 (2008) など
- (3) 想定される利用者層・利用シーン
  - 「学部生向け・初学者向け」との声。
  - 大学院生や教員にも適しているとの報告。
  - 眞喜志 (2014)、飯野 (2016)、北山 (2017)、林ほか (2015)、林ほか (2016) など
- (4) 既存OPACとの関係 林ほか (2015) など
- (5) 利用形態の検証 Foster et al. (2011) など、国外では多数。  
検索結果が多すぎる、閲速度の不足などの不満  
Scott and Reese (2012)、飯野 (2017) など

## 2. 先行研究と検討課題

- ▶ 国内ではWSDを導入していても、OPACが最初の検索オプションである傾向。「OPAC主義」。
- ▶ 国内では研究 자체がごく限定的。
- ▶ 想定する利用者層や利用シーンについて、コンセンサスがない。
  - 「学部生向け・初学者向け」との声の一方で、大学院生や教員に適しているとの報告も。
  - 大学図書館側から「検索結果が多すぎて使いにくい」と否定的な声も。
- ▶ 学術情報提供がOPACだけでは不十分という指摘の一方で、WSDのメリット・デメリットや改善すべき点について、一般的認識がない。

### 3. 研究目的

► WSD利用者をインタビュー調査し、WSDの利用要因や利用状況、WSDに対する認識はどのようなものかを明らかにする。

## 4. 調査手法

- ▶ 対象：大阪大学・同志社大学、WSD利用者・利用経験者。15名。  
(両大学ともOPACが最初の検索オプション)
- ▶ 半構造化インタビュー。
- ▶ 対象者の募集：メール・対面・SNSなどで、紹介や拡散依頼、直接の打診などにて。「関心相関的サンプリング」。
- ▶ 場所：学内共有スペースなど。Skype希望者はSkypeにて。
- ▶ 期間：2020年2月17日～4月21日 \*謝礼：図書カード2千円分

## 5. インタビューの結果

### ▶ 対象者（15名）の概要

【所属】 大阪大学：9名、同志社大学：6名

【身分】 学部1-2年：2名

学部3-6年：4名（6年制学部卒業者1名含む）

大学院生：7名（修士修了1名含む）

教員：2名（退職者1名含む）

\* 身分は2020年3月時点。

【分野】 総合：1名、人文社会：9名、理工：3名、生物：2名。〔文系：9名、理系：6名〕

\* 1名はWSDを「（現在は）ほぼ使っていない」。結果から一部除外。

## 5. インタビューの結果

### ▶ 対象者（15名）の概要

#### 【対象者の傾向】

WSDを比較的長期間、サブツールとして使用。WSDをある程度理解し、他のツールと意識して使い分けをしている。

## 5. インタビューの結果

### ▶分析方法

- 文字起こしのテキストから、インタビューシートの項目に沿って行う。
- 発話からキーワード等を分析シートに抜き出し。
- 概念ごとに類型化。
- インタビューシートの想定を超えた発話は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) に基づき、分析ワークシートを作成。
- 概念名・定義・ヴァリエーション（具体例）・理論的メモを記載。

## 5. インタビューの結果

- ▶ 利用目的：「補完的に」「幅広く」の発話が多い（メインツールというよりサブツール）。
- ▶ 好きな点：「幅広さ」の発話が多い。
- ▶ 「図書」よりも「雑誌論文」を探す際にWSDを使用する傾向（学部2年生以上の全員は、雑誌論文を探す際にWSDを利用）。
- ▶ 知ったきっかけ、使い始めたきっかけ：「自ら発見」の発話が多い。

## 5. インタビューの結果

- ▶ 「雑誌記事、多様な媒体なども含めて、検索対象が広い」という機能について  
→ 「肯定」の発話が多い。
  
- ▶ 「検索結果が多くすぎて使いにくい」という声について  
→ 「不満なし、気にしない」の発話が多い。

## 5. インタビューの結果

- ▶ 「学部生向け・初学者向け」という考え方について
  - 「肯定」「否定」の発話ともにあり。
  - 「否定」 = 学部生・初学者に不適 の発話が、6年制学部卒業者・大学院生以上から。
- ▶ 「学部生はWSDではなくOPACを優先する」という考え方について
  - 「肯定」「否定」の発話ともにあり。
  - 「肯定」 = OPACを優先する の発話が、学部4年生および大学院生以上から。

## 5. インタビューの結果

► インタビュー項目に含めていない「WSD自体の名称、イメージ」についての発話。

「名前でこれ（まとめて検索）だったら多分その全部のデータベースでやってくれるんだろうな」  
(大阪大学の対象者)

「ブランド名が足りないですね」(同志社大学の対象者)

## 6. 考察と課題

► (1) WSDはサブツールとして「補完的に」「幅広く」利用される傾向

(OPACが最初の検索オプションである大学では)

- 要因
  - 自然に認知される機会が少ない。
  - 周囲から教えられる機会が少ない。
  - 図書館からの案内が少ない。

► (2) WSD利用者のデメリット認識の低さ

- 提供側の大学図書館が否定的な印象をWSDに対して持つべきではない。

## 6. 考察と課題

### ▶(3) WSDは大学院生・教員にも有用

- 「学部生・初学者」がWSDを利用するのに一定のハードルがあることを示唆。
- これまでの「学部生・初学者向け」は定義が曖昧。

⇒ 「学部低年次生」

= 主に学部低年次生。雑誌論文をあまり使用しない人。  
学術情報の種類の理解が不十分で、データベースの使  
い分けに習熟していない人。主に日本語文献を使用す  
る人。

- 「学部低年次生向け」という考え方には疑問。

## 6. 考察と課題

### ► (3) WSDは大学院生・教員にも有用

- 利用者への案内の改善。

学部低年次生には、状況に応じた使い方（使い分け）のサジェスチョン。学部高年次生・院生には、WSDでこれまで探せなかつた資料を見つけられる可能性がある説明。

### ► (4) 利用者向け名称は分かりやすく

## 6. 考察と課題

### ▶(5) 本研究の限界と課題

- 1) WSDが最初の検索オプションの大学では、状況が異なる可能性。
- 2) 非利用者のWSDに対する印象、WSDを利用しない理由などは対象外。また、WSDをメインツールとする利用者の認識は不明。

## 7. 本研究の意義

### ► 学術的意義

WSD利用者の利用要因や利用状況、認識についての研究が非常に不十分な中、探索的な調査を実施し、その一部を提示した。

### ► 社会的意義

実践の場面、利用状況の理解や、サービス改善にあたって、参考になることを提示できた。

# 参考文献（一部）

- ・片岡真 (2010) 「ディスカバリ・インターフェース(次世代OPAC)の実装と今後の展望」『カレントアウェアネス』305、11-5。
- ・総務省統計局 (2021) 「学術情報基盤実態調査」e-stat 政府統計の総合窓口 (2021年7月17日取得、<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400601&tstat=000001015878> )。
- ・THE (2017) World University Rankings 2016-2017 (Retrieved on September 15, 2017, [https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2017/world-ranking#!/page/1/length/25/sort\\_by/rank/sort\\_order/asc/cols/stats](https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2017/world-ranking#!/page/1/length/25/sort_by/rank/sort_order/asc/cols/stats) ).
- ・kitone (2014) 「国内大学図書館におけるディスカバリーサービス導入事例のリスト」ささくれ 2014年4月13日 (2017年7月20日閲覧、<http://cheb.hatenablog.com/entry/2013/03/19/122041> )。
- ・Yang, S. Q., and Hofmann, M. A. (2011) Next Generation or Current Generation?: A Study of the OPACs of 260 Academic Libraries in the USA and Canada. Library Hi Tech, 29 (2), 266-300, (Retrieved on January 31, 2018, <https://doi.org/10.1108/07378831111138170> ).

## 参考文献（一部）

- ・工藤絵理子・片岡真（2008）「次世代OPACの可能性—その特徴と導入への課題」『情報管理』51（7）、480-98。
- ・久保山健（2008）「次世代OPACを巡る動向—その機能と日本での展開」『情報の科学と技術』58（12）、602-9。
- ・眞喜志まり（2014）「東邦大学メディアセンターにおけるSummon(TOHO Search)の導入事例」『薬学図書館』59（3）、182-9。
- ・飯野勝則（2016）『図書館を変える!—ウェブスケールディスカバリー入門』ネットアドバンス。
- ・北山信一（2017）「鹿児島大学Summon運用事例報告—まなぶたSearchの4年—導入から運用まで」『[サンメディア学術情報ソリューションセミナー]』
- ・林豊・大田海・堀優子・星子奈美（2015）「九州大学附属図書館のWebサイトに関するアンケート実施報告」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2014/2015、46-54。
- ・林豊・大田海・堀優子・兵藤健志・星子奈美（2016）「九州大学附属図書館の2015年度Webサービス改修プロジェクト」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2015/2016、21-4。

# 参考文献（一部）

- Foster, N. F., Clark, K., Tancheva, K., and Kilzer, R. (eds.) (2011) Scholarly Practice, Participatory Design and the eXtensible Catalog, (2011, Association of College and Research Libraries), UR Research, (Retrieved on January 9, 2020, <http://hdl.handle.net/1802/12375> ).
- Scott, B. T., and Reese, P. E. (2012) Academic Libraries and Discovery Tools: A Survey of the Literature. *College & Undergraduate Libraries*, 19 (2-4), 123-43, (Retrieved on January 13, 2018, <http://dx.doi.org/10.1080/10691316.2012.697009> ).
- 飯野勝則 (2017) 「ウェブスケールディスカバリーの運用とその展開可能性」『日本図書館研究会 第326回研究例会』2017年1月。

\* 全ての参考文献は、修士論文に掲載。

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/8331/>